「復興･協同」通信　No.16 (2014.3.31)

櫻井　史朗

東日本大震災に遭遇して　その４　―徒歩での２日がかりの帰宅と被災生活―

1.石巻でやっと妻と連絡取れる

3 月 16 日、午前 9 時過ぎに救援物資を積んだ自衛隊のジープが 2 台到着した。まさに待ちに待った到来だ。被災者の皆さんにとっては食料供給車、我々にとっては期待の「帰還車」だ。段ボール箱に入った食料などを早速 2 階の物資置き場に運搬した。鮎川での最後のご奉仕だ。作業にも今まで以上に気合が入り、30 分弱で完了した。隊員から「石巻の総合運動場にある救援基地まで送ります。石巻からの交通機関はまったく動いていません。移動手段がない場合は、とりあえず石巻の避難所へ入るとよいでしょう」と説明があった。ジープは 9 時 55 分に出発。鮎川での避難所生活は足掛け 5 日間であったが、密度が濃かっただけに感慨深い。鮎川の皆さん、特に市職員の方々には大変お世話になった。別れ際に職員の方々にお礼を言うと、「がんばって必ず復興します！　これに懲りずに鮎川や金華山にまた来てください」と、疲れ切っている顔に精一杯の笑顔を浮かべて送り出してくれた。〈鮎川の皆さんお世話さまでした。がんばってください！〉と心で叫びながら避難所を後にした。牡鹿半島の尾根を走るコバルトラインを通って石巻へ向かう。太平洋は何事もなかったように悠然とした姿を見せている。〈あんなに痛めつけておいて知らん顔はないだろう〉と、海好きの私もこの時だけは憎らしく感じた。道はあちこちで分断されていたが、自衛隊員の応急修理によってどうにか通れるようになったのだ。ジープは亀裂や陥没を巧みに避けながら進んだ。途中、たくさんの車が放置されていた。地震時に乗り捨てられたものだろうか、それともガス欠のためだろうか。

ジープは女川を経て石巻総合運動公園に到着した。自衛隊や各県からの救援隊が集結している。ほんとうにありがたいことだ。ここは救援基地なので電波が強いのだが、私の携帯は通じない。震災以来 6 日間家族と連絡が取れていないと、窮状を訴えると、「特別に 10 秒くらいで…」と言いながら自分の緊急用電話を貸してくれた。電話がつながったとたん「おとうさん？　よかった！」と、妻の叫ぶような声が飛び込んできた。お互いの無事がやっと確認できた劇的瞬間だった。この短い言葉には、連絡を待ちわびていた気持ちと安堵感が凝縮されていた。「今、石巻にいる。明日帰るから…」と伝える私の声は完全に上ずり、目頭は熱くなっていた。話したいことはいっぱいあったが“10 秒だけ”が気になり、すぐに電源を切った。心にのしかかっていたものが一挙に外れたような気がして、体からもどっと力が抜けた。この 10 秒程度のやり取りは、私にとっては宝の時間だった。私と妻を深く結びつけたことは間違いない。一生心に残る会話になった。

2.姉の家は流出、実家は空洞化

私は、石巻市内に住む姉夫婦の安否を確認してから東松島市の実家へ向かうことにして、仲間と別行動をとった。他のメンバーは、家が無事だった仲間のところにお世話になることになった。私は総合公園から約 4 キロの距離にある標高 50mほどの日和山公園へ向った。途中の道は未だ泥沼状態で、両脇にはがれきがうず高く積まれていた。ひざ近くまで泥に埋まることもあり、やっと2時間近く掛かってたどり着いた。公園から一望すると、一面薄暗く、灰色がかった茶色の世界が広がっていた。緑が消えた、殺伐を通り越した凄惨な世界だ。海岸付近や北上川沿いは、何も残らず流出するか、がれきに覆われていた。門脇方面は密集住宅街だったが、今は、空洞化した建物がぽつんぽつんと残されているだけだった。北上川の対岸にある姉の家は予想通り見事に消滅していた。がれきさえも残っていない。消息が心配だが、対岸に渡る内海橋は、やがれきや車や船で埋まって通行は不能だった。あきらめて、東松島市矢本の実家に向かうことにした。

矢本までは国道 45 号線経由が近いが、ところどころ冠水しているので、内陸にある三陸自動車道と並行して走る広域農道へ向った。その途中の市街地はかなりの地域でまだ水が引いていないし、いまだに水没しているところもあった。こんなに海から離れたところまで水が襲って来たのかと思うと恐ろしくなった。〈人間の築き上げた文明社会も、大自然の前にはなす術がない〉と実にストレートに感じた。「人間は大自然の前に謙虚であれ」と改めて思う。たった 5 キロほどを 2 時間以上掛かってやっと、三陸自動車道の石巻･河南インター近くにたどり着いた。やれやれと思いながら、付近にあるイオン石巻店の建物を見たとたん激しい空腹感に襲われた。思えば、朝食前に鮎川を発って来たので、前日の夕方 5 時以来、何もお腹に入れていなかったのだ。体も疲労困ぱいだった。吸い寄せられるようにして建物の中に入って行くと、ここは避難所になっていた。たくさんの人々が、疲れ果てた姿で座り込んだり横たわったりしていた。店長の判断で、店の商品を被災者へ無料で提供しているとのことだった。私も店員さんに、昨晩から何も食べていないこと、これから歩いて仙台まで帰らなければならないなどの事情を話すと、気の毒がってメロンパンをまるまる 1 個提供してくれた。その時は〈えっ、丸々1 個…〉というむしろおどろきの気持ちだった。震災以来、パン 1 個なんて食べたことがない。この時のメロンパンは、一生で一番おいしい「思い出のパン」になるだろう。この 1 個のパンは、「幸せとは何か」を強く感じさせてくれた人生の恩人でもある。

おかげで 10 数キロある実家に着いた。海から 2.5 キロほど離れた母の家は全壊で、2 階まで浸水して 1 階部分は泥とがれきで埋もれていた。近くの弟宅が幸い床上浸水で済んだので、そちらに 1 泊した。ただ、石巻の姉夫婦の消息が依然として分らなかった。残念ながら亡くなったと思い、その夜は弟夫婦と 3 人でしんみりと姉の思い出話をした。しかし驚いた……。震災 8 日後の 19 日に電気が通じたので、テレビをつけたところ、突然、姉夫婦が避難所でインタビューを受けるシーンが映し出されたのだ。まさに驚きと喜びが同時に湧き上がった。家の流失はともかく、身内が全員無事だったのは何よりであった。思わずただただ感謝した。

3.惨憺たる故郷の被災地を歩いて仙台の我が家へ向かう

翌 17 日朝 6 時、50 数キロある仙台の我家を目指して東松島市の実家を出発した。義妹は残り少ない米で大きなおにぎりを 2 個握ってくれた。なんだか昔の旅人のような気分だ。四国遍路では 1 日平均 30 キロ以上歩いていたので歩きには十分自信はあった。国道 45 号線をひたすら遠い我が家に向かって歩いた。両側の田畑は未だ水没したままだ。初めの内はヒッチハイクをしようという思いもあり、何度か手を挙げたがどの車も定員いっぱいだった。あきらめて歩き通す覚悟が固まった。45 号線と並行して走るJR仙石線は、大量のがれきやヘどろや車で蓋われ、線路があちこちでねじ曲げられている。小野駅は駅舎もプラットホームも、がれきやヘドロで完全に埋まっていた。

鳴瀬大橋を渡ってから海寄りの野蒜方面に向うと、大きな漁船ががれきの山に乗り上げているのを何度も見た。数メートルの深さがあった運河はすっかり浅くなっている。津波は防風林の松をなぎ倒し、家や車やがれきを運河に押し流したのだ。そんな危険な運河の中で、自衛隊員が腰まで水に浸かりながら、ひたすら遺体の捜索を行っていた。これまでもあちこちの被災地で、隊員たちの献身的な働きぶりに感謝と感激の涙をためたことが何度もあった。鳴瀬川と松島湾を結ぶ東名運河沿いの道路にはがれきが積もり、これを乗り越えながら進むしかない。東名駅は仙石線の中で最も被害が大きかった。駅舎は消滅し、線路もプラットホームも、がれきや船で覆い尽くされていた。付近の跨線歩道橋から眺めると、大きな地盤沈下のため砂浜や陸地が海になってしまったことがよくわかった。コンクリートの建物が海の中に建っているという感じだった。

東名から松島へ抜けて仙台へ向かおうとしたが、がれきで道がふさがれていて歩くのがかなり困難だった。やむを得ず新東名の住宅街から山越えして再び 45 号線へ戻った。8 キロの遠回りだった。三陸自動車道「鳴瀬奥松島インター」付近で石巻広域消防桃生消防署員の車に拾われ、利府までの 10 数キロを乗せてもらった。彼自身も被災者であった。石巻市内でも特に津波被害の大きかった門脇地区の借家は流出した。家族（奥さん、4 歳と 1 歳の子供、奥さんのお母さん）は幸い無事避難し、利府にある奥さんのお母さんの実家に身を寄せているとのことだった。私はその付近で下してもらった。彼は別れる時、涙ぐんで私の両手を握った。同じような境遇に共鳴してこれまでのつらい思いがいっぺんに噴出したのだろう。そこから重い足を運びながらさらに歩き続け、夕方になってようやく懐かしの我が家にたどり着いた。8 日ぶりの帰宅であった。息子が震災の日にすぐに、千葉県から 15 時間かけて駆け付けて復旧に専念してくれたとのことで、実に頼もしく感じた。その夜、アルミ製のプリンカップに入れたわずかの水をローソクの火で沸かし、インスタントコーヒーを作って 3 人でちびりちびりと回し飲みをした。3 人でゆっくりと語り合ったのは何年ぶりだっただろうか。薄暗い雰囲気での語らいは最高だった。この時の幸福感は忘れられない。こんなささやかさが実は大きな幸せなのだと心から思った。不幸の中にこそ幸福が存在するのだ、という真実を大震災で教わったのである。

4.我が家は大規模半壊、いとおしく感じた当たり前の生活

家は内外ともに大きな被害を受けた。だが、あちこちで津波被害の惨状を見ていただけに、家が残っただけでもましだと平静に受け止めることが出来た。仙台市の調査では、全壊に近い「大規模半壊」であった。柱がもう 0.3 度傾くと全壊だったと言われた時には何とも複雑な気持ちだった。リホームしてあまり期間が経っていないので残念である。大きな損傷を受けたので、修理して住み続けるか否かの判断に迫られた。転居も考えたが、業者の耐震審査で「かなり危険」だが、大規模に修理すれば住むことは可能との事であり、幸い地震保険が下りたので修理することにした。しかし修理開始までは、震度 1～2 程度の余震やそよ風でもギシギシという音を立てて不気味に揺れた。そのたびに倒壊を恐れて庭に逃げ出した。未だに寝るときには、懐中電灯と履物を枕元に置いている。

ガソリンの給油に何日間も並んだ。朝早くから並んでも途中で店が閉まることもあったし、閉店しているスタンドにいつまでも並んでいたこともあった。食料がなかなか手に入らなかったのは言うまでもない。ライフラインの復旧は、水道が 3 月 18 日、電気が 3 月 18 日、ガスが 4 月 1 日だった。当たり前の日常がいかに貴重なものかが思い知らされ、いとおしくさえ感じた。生活を見直すきっかけになったし、工夫しながらの生活も改めて学ばせてもらった。

家の工事はなかなか始まらなかったが、何が幸いするかわからない。5 月 12 日の集中豪雨で、家のあちこちに激しい雨漏りが起こった。工務店に泣きついたところ早速やって来て、5 月 18 日から家の修理が始まった。だが職人があちこちの現場を掛け持ちしていているし、資材の入手に合わせて、突然やってきたり休んだりする。そのため留守にできない。また、いろいろな部屋の工事を同時進行させる場合も多いので、まともに使える部屋がなく、落ち着ける場がないしプライベートも保てなかった。また、暑い時期に外壁塗装に入ったので、すべてのガラス戸や窓が 2 週間ほどビニールで覆われ、私の部屋は、日中、毎日 40 度近くになっていた。どうにか震災半年後の 9 月中旬に工事がほぼ完了した。長い 6 カ月だった。多少気が緩んだせいか、秋口に体調を崩したが、翌年になってすっかり回復して平常の生活に戻った。

私は、金華山で 3 度も命が助かったので、被災者や被災地のために役立とうとあちこちの被災地にボランティアや犠牲者の人々の慰霊に出かけている。現在「震災した人々の心の復興を目的とする祈りの場創設」「災害の記憶と教訓の伝承」「防災や命を守る教育」を柱とする活動を継続中である。この活動については次回で述べたい。